

メッセージアウトライン サムエル記第二3：1～39 「愚か者が死ぬように」

[1]「サウルの家とダビデの家の間には、長く戦いが続いた。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった」

イスラエルの北部を治めるサウル家と南のユダで王とされたダビデとその家。これは大掛かりな戦争ということではなく、敵対状態と小競り合いが続いた結果のことであろう。またダビデ家に加わる者たちも多くいた。

[2-5] ダビデの家族 ヘブロンで生まれた子どもたち。

[2]長子はイズレエル人アヒノアムによるアムノン。

[3]次男はカルメル人ナバルの妻であったアビガイルによるキルアブ。

三男はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブサロム。ゲシュルはガリラヤ湖の東の地方。

[4]四男はハギテの子アドニヤ。

五男はアビタルの子シェファテヤ。

[5]六男はダビデの妻エグラによるイテレアム。

ダビデはヘブロンで七年半王として治めたが(5:5)、その期間に六人の子が生まれた。これは彼がヘブロンで繁栄していたことを示すものである。しかし、妻はみな違う。聖書が教えるのはあくまでも一夫一妻制であり(創世紀2:24)、いかに権力があっても、一夫多妻は後に様々な問題を起こす。ダビデの場合も例外ではない。

[6-11] イシュ・ボシェテとアブネルの不和

イシュ・ボシェテは戦死したサウル王の四男でペリシテ人との戦いで、息子たちの中で彼だけが生き残り、サウル軍の長アブネルとヨルダン川東のマハナインに逃げ、イスラエルの新たな王となっていた。

[6-7] アブネルはサウルの家で勢力を増し加え、サウルの側女リツパと通じ、それをイシュ・ボシェテに詰問されると、逆に怒り出した。このことでもイシュ・ボシェテとアブネルとの力関係が逆転していたということが分かる。

[8-11]「アブネルはイシュ・ボシェテのことばを聞くと、激しく怒って言った。『この私がユダの犬のかしらだとでも言うのか。今日、私はあなたの父サウルの家と、その兄弟と友人たちに真実を尽くして、あなたをダビデの手に渡さないでいる。それなのに今日、あなたは、あの女のことで私をとがめるのか。主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私がダビデのために果たさなかったなら、神がこのアブネルを幾重にも罰せられるように。それは、サウルの家から王位を移し、ダビデの王座をダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるということだ。』イシュ・ボシェテはアブネルを恐れていたのです。彼に、もはや一言も返すことができなかった」

アブネルはサウル家に忠実に仕えてきたのに、それくらいのことで私をとがめるのかと激しく怒る。しかし、王の妻妾と通じるということは王位継承者であることを主張するに等しい行為。そのことは彼もわかっていただろう。この言動にも主君の子を軽く見ていることが分かる。

「犬のかしら」とは最大の軽蔑のことば。

10節を内容とする「主がダビデに誓われたとおりのこと」とは文字どおりには聖書に記録されていない。それゆえこれはアブネルが今までダビデについて見聞きしていたことをまとめた内容であったと思われる。「ダンからベエル・シェバ」というのはイスラエル国土の北から南までという意味。

アブネルの剣幕に、もはやイシュ・ボシェテは何も言えなかった。

[12-21]アブネルとダビデとの会談

[12]「アブネルはダビデのところに使者を遣わして言った。『この国はだれのものでしょうか。私と契約を結んでください。ご覧ください。私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します。』」

アブネルはダビデのもとに使者を送って、全イスラエルを彼の支配のもとに移すことに協力すると言わせた。

[13-14]「ダビデは言った。『よろしい。あなたと契約を結ぼう。しかし、条件が一つある。それは、あなたが私に会いに来るときは、まずサウルの娘ミカルを連れて来ること、そうでなければ私に会えないということだ。』ダビデはサウルの子イシュ・ボシェテに使者を遣わして言った。『私がペリシテ人の陽の皮百をもってめとった、私の妻ミカルを返していただきたい。』」

ダビデはここでアブネルとイシュ・ボシェテの両方に自分のことばを伝えている。イシュ・ボシェテとミカルはともにサウルの子であり、ダビデは先代サウル王の娘婿としての身分を示し、あとでアブネルに恩着せがましい態度を取らせないためであっただろう。

[15-16]「イシュ・ボシェテは人を遣わして、彼女をその夫、ライシュの子パルティエルから取り返した。彼女の夫は泣きながら彼女の後を追ってバフリムまで来たが、アブネルが『行け。帰れ』と言ったので彼は帰った」

ミカルはダビデがサウルにいのちを狙われて逃亡したときに、サウルによってパルティエルの妻とされていた。→ Iサム25:44 ダビデは自分の正当な妻としてミカルを取り返したのである。サウルによって将棋の駒のように別人の妻とされ、今また別れさせられたミカルはどのような気持ちであったであろうか。パルティエルも愛深き人物であったようであるが、泣く泣く自分の家に帰るよりほかはなかった。「バフリム」はエルサレムの北東数キロメートルの所。

[17-19]「アブネルはイスラエルの長老たちと話してこう言った。『あなたがたは、かねてから、ダビデを自分の王とすることを願っていた。今、それをしなさい。主がダ

ビデについて、【わたしのしもべダビデの手によって、わたしはわたしの民イスラエルをペリシテ人の手、およびすべての敵の手から救う】と言われたからだ。』アブネルはまた、ベニヤミン人とじかに話し合った。それから、アブネルはまた、ヘブロンにいるダビデのところへ行き、イスラエルとベニヤミンの家全体が良いと思っていることを、すべて彼の耳に入れた」

「イスラエルの長老たち」…彼らの多くは親ダビデ派であった。

「ベニヤミン人」…サウル家はベニヤミン族出身であり、ベニヤミン族はサウル家から厚遇を受けていた。→ I サム22:7 したがって、アブネルは彼らを特に説得する必要があった。アブネルもベニヤミン族である。→ I サム14:50

[20-21]「アブネルは二十人の部下とともにヘブロンのダビデのもとに来た。ダビデはアブネルとその部下のために祝宴を張った。アブネルはダビデに言った。『私は、全イスラエルをわが主、王のもとに集めに出かけます。彼らがあなたと契約を結び、あなたが、お望みどおりに王として治められるようにいたしましょう。』ダビデはアブネルを送り出し、アブネルは安心して出て行った」

「祝宴」…相互間に契約が成立した場合は祝宴を設けるのが当時の習慣であった。現代もそうか。もちろんダビデの妻ミカルも同伴されていたであろう。

「アブネルは安心して出て行った」…おそらくダビデの王国における高い地位が保証されたのであろう。

[22-25]ヨアブのアブネルへの殺意

[22]「ちょうどそこへ、ダビデの家来たちとヨアブが略奪から帰り、たくさんの分捕り物を持って来た。しかし、アブネルはヘブロンのダビデのもとにはいなかった。ダビデがアブネルを送り出し、もう安心して出て行っていったからである」

ダビデとアブネルの会見にヨアブの不在中が選ばれたのは意図的であったのかもしれない。

[23] その時、ダビデとアブネルの会見の時が持たれ、その結果、アブネルは安心して出て行ったとヨアブに告げる者があった。

[24-25] それを聞いたヨアブはダビデを責め、アブネルはダビデを惑わし、動静を探るために来たのだと言った。

[26-27]ヨアブのアブネル暗殺

「ヨアブはダビデのもとを出てから使者を遣わし、アブネルの後を追わせ、彼をシラの井戸から連れ戻させた。しかし、ダビデはそのことを知らなかった。アブネルはヘブロンに戻った。ヨアブは彼とひそかに話そうと、彼を門の内側に連れ込み、そこで彼の下腹を刺した。こうして、アブネルは、彼がヨアブの弟アサエルの血を流したことのゆえに死んだ」

「シラの井戸」…場所不明。ヘブロンからそう遠くない所であろう。ヨアブはダビデの名を使ってアブネルを呼び戻したのかもしれない。そしてアブネルを暗殺した。こ

これはダビデがアブネルを自分と同じか、またはそれ以上の地位に登用するのではと嫉んだことと、弟アサエルを彼に殺されていることの恨みからの行動である。

[28-30]ダビデの潔白性の主張

「後になって、ダビデはそのことを聞いて言った。『ネルの子アブネルの血については、私も私の王国も、主の前にとこしえまで潔白である。その血は、ヨアブの頭と彼の父の家の全員に降りかかるように。またヨアブの家には、漏出を病む者、皮膚をツアラアトに冒される者、糸巻きをつかむ者、剣で倒れる者、食に飢える者が絶えないように。』ヨアブとその兄弟アビシャイがアブネルを殺したのは、アブネルが彼らの弟アサエルをギブオンでの戦いで殺したからであった」

ダビデはアブネルの死について、自分と自分の王国は潔白であることを主の前に主張する。そしてこの暗殺の張本人ヨアブとその家に神の呪いが降りかかるようにと願う。

「漏出を病む者」とは今日の性病のことを言うと思われる。→レビ15:2-12

「ツアラアト」…宗教的な汚れを表し、以前は「らい病」と訳されたが誤訳であり、体だけでなく、建物や着物にも発生するので、原文のままツアラアトと記されている。→レビ13-14章

「糸巻きをつかむ者」…糸巻きしかできないような軟弱な者

「31-32」ダビデは、ヨアブと彼とともにいたすべての兵に言った。『あなたがたの衣を引き裂き、粗布をまとい、アブネルの前で悼み悲しみなさい。』そして、ダビデ王は棺の後をついて行った。彼らはアブネルをヘブロンに葬った。王はアブネルの墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた」

ダビデはアブネル暗殺で自分かけられる誤解を解くために最善を尽くしている。これは国葬ともいえる葬儀である。しかし、その中にヨアブも入れるとは。…

[33-34]「王はアブネルのために哀歌を歌った。

『愚か者が死ぬように、アブネルは死ななければならなかったのか。

あなたの手足は縛られず、かせにもつながれずに。不正な者の前に倒れるように、あなたは倒れてしまったのか。』

民はみな、さらに続けて彼のために泣いた」

ダビデは悲しみと嘆きの歌、哀歌をアブネルのために作った。アブネルは愚か者ではない。また手足を縛られ、かせにつながれる囚人でもなかった。しかし彼は倒れた。「不正な者の前に倒れるように」…アブネル殺害が暗殺であることを示している。

[35-37]「民はみな、まだ日のあるうちにダビデに食事をとらせようとしてやって来たが、ダビデはこう誓った。『もし私が、日の沈む前に、パンでもほかの何でも口にすることがあれば、神がこの私を幾重にも罰せられますように。』民はみな、そのことを認めて、それで良いと思った。王のしたことはすべて、民を満足させた。民はみな、

そして全イスラエルは、その日、ネルの子アブネルを殺したのは、王から出たことではないことを知った」

死者の葬りの日には断食をして悲しみを表すのが常であり、ダビデもそれに倣った。このようなダビデの悲しみの表現は心からのものであり、民はアブネル殺害はダビデから出たことではないことを知った。そしてそれはまたサウル家の復讐を招かないためでもあった。

[38-39]「王は自分の家来たちに言った。『今日、イスラエルで一人の偉大な軍の将が倒れたのを知らないのか。この私は油注がれた王であるが、今日の私は無力だ。ツェルヤの子であるこれらの者たちは、私にとっては手ごわすぎる。主が、悪を行う者に、その悪に従って報いてくださるように。』」

ここはダビデの側近への打ち明け話となっている。①アブネルがイスラエルの偉大な将軍であったとの評価。②ツェルヤの子たち(ヨアブとアビシャイ)のダビデを差し置いての傍若無人ぶり。確かにヨアブとアビシャイは勇猛な武人であったが、猪突猛進で周りへの配慮が欠けていた。

③それを抑えきれないダビデの力不足の嘆き。今は王国建設のためにヨアブたちの助力が必要であり、ヨアブを処罰することができない。④主が悪を行う者(彼ら)の悪に従って報いてくださるようにとの願い。

今日の箇所からはアブネルの野心と自信、ヨアブの私的復讐、アブネルの死に対するダビデの嘆きと自らの潔白さの表明が強調されている。

北イスラエルをまとめ、ダビデの王国と一つにしようとして動いていたアブネル。それを動静を探りに来たとの理由をつけ、暗殺してしまったヨアブ。そのヨアブに対する無力さを自ら嘆くダビデ。

まとまる話もまとまらず、事態は混とんとして行く。しかし、このような出来事をも用いて、主なる神のご計画(具体的にはダビデを王とするイスラエル統一王国の実現)は摂理のうちに一步一步と実現に近づいて行く。それはダビデを用いてイスラエルを神の民として整え、神の御栄光を表す王国とするためであった。そしてこのダビデの子孫として神の御子イエス・キリストはこの世に来られるのである。→マタイ1章

神は最初の人間アダム以来、罪ある者となった人間のために、救い主を送ることを計画され、アブラハムを選ばれ、ご自身だけが力ある真の神であることを教え、示された。そしてその子孫の中から救い主に続く家系としてダビデを選ばれた。しかし、ダビデも罪や様々な弱さのある人間であることを覚えておかなければならない。彼は自分の判断でものごとを決めて、神のみこころでない道に進み、神の不興を買うことがあった。しかし、神はそのようなダビデを直ちにさばくことをせず、悔い改めに導き、愛と恵みのうちに、ご自身の救いの計画を進めていかれるのである。

→Ⅱサム12章、詩篇51篇

そして、神は今も信仰をもって救い主イエス・キリストに従う私たちを、様々な失敗

や罪を犯す者であったとしても、同様に愛と寛容と忍耐をもって導いていてくださる。

旧約の歴史は戦いや殺し合いの絶えない歴史であるが、それはまた現在に続く人間の罪の歴史であることを覚えなければならない。→マルコ7:20~23 そしてその解決はただイエス・キリストにのみあるのである。→ヨハネ3:16、ローマ5:1、エペソ2:12~18